

山梨県立文学館 館報

1989(平成元年)年
11月 創刊

第106号



心平さんがいつも隣に 和合亮一 2
 企画展「歿後30年 草野心平展 ケルルン
 クックの詩人、富士をうたう。」
 展示資料より 3
 閲覧室より・寄贈資料より 4

教育普及事業より・館からのご案内 5
 資料翻刻 太田黒克彦 竹村坦宛書簡 6・7
 館の日記 ・利用のご案内 8

企画展 「歿後30年 草野心平展」

ケルルンクックの詩人、富士をうたう。」 開催

平成三十年九月二十二日(土)～十一月二十五日(日)

独自の表現で詩の世界を切り開いた草野心平(一九〇三～一九八八)は、福島県石城郡上小川村(現・いわき市小川町)に生まれた。中国・嶺南大学(現・中山大)留学の頃より本格的に詩作を始め、詩誌「銅鑼」を創刊、高村光太郎や宮沢賢治らと交友を結んだ。一九二八(昭和三年)十一月に蛙の詩を集めた活版第一詩集『第百階級』(銅鑼社)を刊行し、以来起伏に富んだ人生の中で個性的な詩を多く生み出した。現在では、多くの小学校教科書に詩「春のうた」が採用され、蛙の鳴き声を表した「ケルルンクック」のフレーズは



草野心平画「空海富士」油彩
1968(昭和43)年 個人蔵

幅広い世代に親しまれている。

心平を魅了し、創作の重要なテーマの一つとなったのが富士山である。心平は、富士山を「一つの美と存在の象徴」として捉え、「存在を超えた無限なもの」「存在に還る無限なもの」とも感じていたという(「富士山」〈現代詩人の自作自解〉)。その富士山を数々の詩にうたい、書や絵画でも富士の魅力ダイナミックに表現した。

本展では、自身の誕生日記念の富士山来訪のエピソードや、山梨県立甲府南高等学校の校歌作詞など、山梨との関わりについてふれながら、原稿、書、絵画、写真など約二五〇点の資料を通じて、草野心平の生涯と生命力溢れる詩の世界を紹介する。編集委員は阿毛久芳(都留文科大学名誉教授)、蜂飼耳(詩人・作家)の二氏。

企画展関連イベント

講演会

いずれも午後1時30分～3時

「牧歌への回帰」

10月21日(日)
 講師 島田雅彦(小説家)
 会場 講堂 定員500名

「草野心平、詩の理想を求めて」
 10月28日(日)
 講師 蜂飼耳(詩人・作家)
 会場 研修室 定員150名

「宮沢賢治、高村光太郎、そして草野心平―コスモス、世界共通意識と孤絶意識にかかわって―」
 11月10日(土)
 講師 阿毛久芳(都留文科大学名誉教授)

会場 研修室 定員150名

「草野心平と富士山―展示のみどころ―」

講師 伊藤夏穂(当館学芸員)
 会場 研修室 定員150名

※講演会、講座は、参加無料。お電話、ホームページ、当館受付にてお申し込みください。定員になり次第締め切らせていただきます。

○閲覧室資料紹介
 「草野心平の世界」

町田康講演会

9月21日(金)～11月25日(日)
 場所 閲覧室 入場無料

特設展「生誕120年 井伏鱒二展」の関連事業として、小説家、詩人、ミュージシャンとして活躍している町田康氏の講演会「井伏鱒二の笑いと悲しみ」を、六月十日(日)に講堂で開催した。井伏鱒二との出会いに始まり、その独特の魅力について「曲げ」という町田氏独自の捉え方でユーモアを交えて語った。

「井伏鱒二の魅力にあらためて気づかされた」「山椒魚」以外の作品も読んでみたくなった」「井伏さん、町田さん、両方ともさらに好きになった」などの感想が寄せられ、講演後は、参加者の多くが特設会場に足を運んだ。



心平さんがいつも隣に

和合亮一

いわきへ。郡山発の在来線へと乗り込む。夏井川渓谷を過ぎて、草野心平さんの故郷の町である小川郷へ。年に何度か、そこにある草野心平記念文学館へと向かう。緑にあふれた阿武隈山脈の膝元をすり抜けるようにして、列車はゆつくりと滑っていく。

街から山の中へ、そして川沿いへ。車窓の空の表情が少しずつ変わっていく。雄大な景色とそこに浮かぶ雲が、心平さんの心の世界を見せてくれているように感じる。眺めながら駅弁などを開くと、詩人と並んで食べているような気がしてくる。歓迎されるかのように「背戸峨廊」と呼ばれ親しまれている美しい渓谷の入り口のあたりを抜けていく。ここは心平さんが名付けた景勝地である。名づけることがとても得意だったそうである。私の好きな詩の一つにこのような出だ

しがある。「阿武隈山脈はなだらかだった。／／だのに自分は。／よく噛んだ。／鉛筆の軸も。／鉛色の芯も。／阿武隈の天は青く。／雲は悠悠流れてゐた」。

私も良く鉛筆を噛んだものだった。阿武隈の山々の穏やかなうねりを追いかけているとこの詩が浮かび、不思議と独特の鉛筆の味も思い出してしまふ。

口の中に広がる木や芯の香り……。筆の尻に犬歯や奥歯の噛んだ跡がついてしまひ、良くギザギザになっていたものだった。そんなことも思いめぐらせながら、それにしてもどうしてこんなになだらかな風景と鉛筆の姿を取り合わせて、一つの詩にしてしまうのだろう。天性のユニークさや懐の深さのようなものが感じられて、くすりとしてしまふ。

列車は進む。そこだけ突起しているかのようになつて、ギザギザの岩山の影が

見えてくる。さて目的地は近い。こんなふうはこの詩はまとめられている。「なだらかな阿武隈の山脈のひとところに。／大花崗岩が屹ッ立つてゐた。／鉄の鎖につかまつてよど登るのだが。／その二筋山のカガギザラザラが。／少年の頃の自分だった。」

心平少年の影は、あたかもそのまま小さな命へと化身していくかのように感じる。彼は身の回りの生き物を主役にしてたくさん詩を書いている。特に蛙の登場が多くて「蛙の詩人」と呼ばれているゆえんでもある。心平さんは生前、特に彼らに深い愛着を抱いていた。たくましく、したたかに生きていくその姿を、いつも追いかけて飽きることなく描いていたことから察することができ。例えばこの詩は蛙の大合唱の場面である。

「ぎやわろろろりッ そらにはまんげつ。／まんげつのまわりにはおおきなかさ／さあ みんないっしょに げんきにうたおう。／いち にい さあん。／ぎやわろろぎやわろろぎやわろろり／ぎやわろろぎやわろろぎやわろろり」。夜の地べたを這いながら生きている、強い声と生命力が伝わってくる。生活に苦しみながらも詩を書くことを第一

に生きてきた心平さんの後姿が、これらの詩群に宿されているとも感じられる。

震災後、心平さんの故郷も含めた浜通りは、これまでに体験したことのない未曾有の被害を受けた。津波もさることながら、近隣の原子力発電所の爆発により、避難を余儀なくされていた。心平さんの書齋などがあった「天山文庫」のある川内村においても、ほとんどの方が避難をせざるを得なかった。その後にはわずかではあるが、人は戻ってきた。七年が経過した現在も、人口については横ばいの状態が続いているのである。

帰還した方々はかつてのように農業を再開している。田に再び水が引かれた光景を眺めて、人が戻ってきたと村人たちは実感する。それは響き渡る蛙の叫びが大地に充ち満ちた瞬間でもあった。私にこんなふうにつけてくれた方があった。「その声を聞いて、心平さんが弱気になつている私たちを励ましてくれているような気がしましたよ」と。福島で暮らしていると、こんなふうに関心する心平さんがいつも傍らにあるような気がする。

企画展

「歿後30年 草野心平展」

ケルンクックの詩人、富士をうたう。」

展示資料より

①草野心平筆

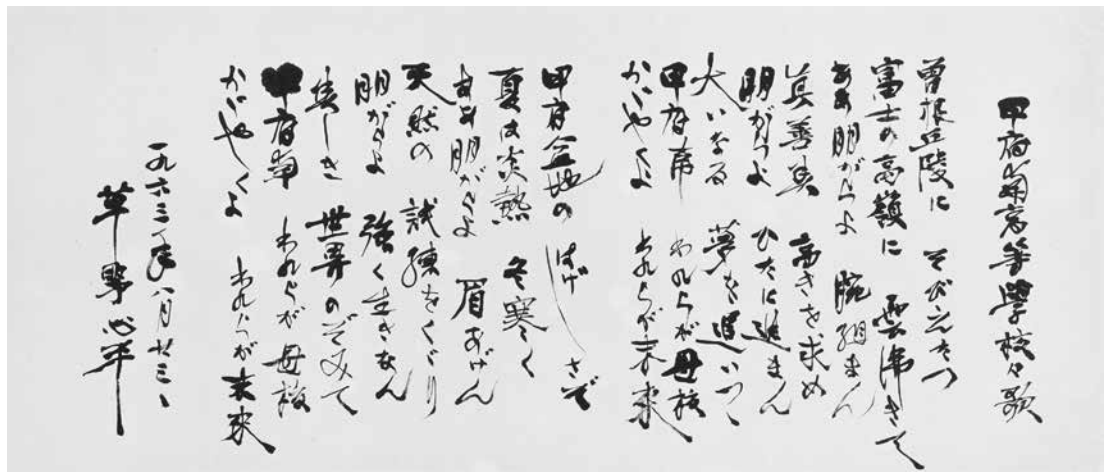
「山梨県立甲府南高等学校校歌」額装

同校蔵

草野心平は、一九六三(昭和三十八)年四月の県立甲府南高等学校開設にあたり、校歌の作詞をした。心平は、全国各地で数多くの校歌作詞を手がけているが、山梨県では本校のみ。

本資料は歌詞の一番と二番を同年八月二十三日に墨書した書。『草野心平日記』第一巻(思潮社)同年七月二十一日の日記には、日向誉夫校長と教頭、詩人で当時の山梨県立塩山高等学校校長の内田義広の三名が、信州蓼科の天下山房で療養中の心平のもとを訪れ、校歌についての打合せを行った記述がある。『山梨県立甲府南高等学校創立二十周年記念誌』(一九八二年十月)によると、心平は、作曲を担当した清水脩らとともに校歌発表会に出席している。

このほか、学生に向けたメッセージ「過去と現在を勉学し 我等未来に生きやう」の墨書の書額も展示する。



②草野心平画

「わが誕生日に 河口湖富士」額装

青春白樺美術館蔵

一九七四(昭和四十九)年五月十二日の誕生日に描かれた富士山のスケッチ。

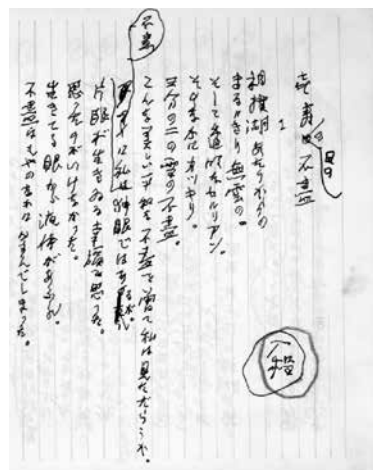


鉛筆、水彩等の画材が用いられている。

『草野心平日記』第三巻(思潮社)同日の項によると、同行五人でライトバンに乗車し、山中湖を訪れた後、吉田口を少し登った。甲府営林署諏訪の森苗圃事務所(現在の富士パインズパークの南)の辺りで心平七十一歳の誕生日を祝い、富士山や赤松の林などをスケッチをした。次に河口湖を来訪し、「富士が漸く頂上を見せたというので湖畔の溶岩の上に腰かけてスケッチ」したという。当日は富士山と赤松林、河口湖畔の溶岩流など計七枚のスケッチを描いたが、そのうちの河口湖での一枚が本資料である。その日の日記は、「いい誕生日だった。ただ遊ぶだけでなく、スケッチしたので気持ちがいい」と締めくくられている。

③草野心平「喜寿の日の不尽」草稿

いわき市立草野心平記念文学館蔵



「喜寿の日の不尽」草稿(部分)

表紙に「日記42 1980 草野心平」と書かれたノートの一九八〇(昭和五十五年)五月二十二日の項に書かれた草稿。「歷程」(同年九月号)掲載後、詩集「玄玄」(一九八一年三月 筑摩書房)収録(ともに題名は「喜寿の不尽」)。

一九八〇年五月十二日の七十七歳の誕生日に、親しい人々とともに車で富士山を訪れた日の出来事に着想した詩。『草野心平日記』第五巻(思潮社)によると、当日は相模湖に寄った後に、富士五合目を訪れ「野天の宴」を開き、徒歩で散策。また、下山後に麓の富士河口湖町の食堂にて地元の食材などを肴に飲食を楽しんだ。心平は富士山に行くことを長年夢見ていたが、晩年になってから実現した。(学芸課 伊藤夏穂)

閲覧室より

涼を求めて

今年梅雨が早々に明けたと思っただけ、一気に夏の盛りのようになり、異常なまでの暑さが続いた。一歩外に出れば、日差しと熱風、温度差が身に堪えた。それだけに、少しでも涼しさが感じられる手段や場所に目が向いた。

暑い時期を乗り切る方法として、近年「クールシェア」ということが言われている。涼しい空間に多くの人で集まって涼しさを分かち合い、エアコンの消費量を減らそうという取り組みだ。現在、全国の多数の自治体で実施され、山梨県でも九月三十日まで「やまなしクールシェア」を推進している。クールシェアを実践できる場所が「クールシェアスポット」で、一般に広く開かれた公共施設や商業施設などが登録している。当館もクールシェアスポットである。

危険なほどの暑さも、この号が発行される頃には落ち着いているだろうか。暑さを感じ、それでいて、無理なく外出できるようなら、目的地としてはもちろん、近くに來られたときでも、クールシェアに当館を訪れて欲しい。作家の貴重な原稿や書簡、愛用品などを見られる展示室や、一休みできるカフェなどで、ゆったり

りと時間が過ごせる。あわせて閲覧室も、さまざまな資料に触れながら滞在できるのでおすすしたい。閲覧室は、木製の家具を配置した小さいながらも落ち着いた空間だ。平日は午後七時まで、土日・祝日は六時まで開いている。展示室を閉室時間まで楽しんでいただいた後でも利用が可能だ。夕方、日も傾けば、わずかでも気温が穏やかになるだろう。先日、閲覧室で資料を見ていた方が、午後五時から少し前に退室されようとした。壁面にあつた利用時間の表示を目にされ、職員に確認をすると、暑くもあるし、もう少し居よう、と、閲覧席に戻って行かれたこともあつた。

閲覧室の一番奥にある閲覧席は、長机に三つずつ椅子を横並びにして、全部で十五席ある。資料の閲覧や調査研究等に利用していただいている。席の正面は大きな窓があり、芸術の森公園のさんさん広場から美術館側を望む。七・八月の土日には、特にこの席が涼しさを感じる特等席になつていた。すぐそばにある池の噴水が稼働していて、十数本の水柱が高々と吹き上がる様子がよく見えたのだ。きらきらと光る水しぶきが見た目にとても涼やかだつた。噴水があつた日には、何となく多くの方にご利用いただいていたように思えた。ふだんは、木々の緑や空の青さの清々しい風景が眺められる。閲

覧席とは別に、室内にはソファアが点在している。閲覧席とはまた違つてくつろいだ気分で見られると思う。そして、好みの席で、資料をいろいろ手に取つて見ていただきたい。

図書・雑誌のほとんどは書庫に保管しているが、閲覧室内にあつて自由に利用できる資料も少なくない。最近発行の雑誌は詩歌や小説などの文芸誌、県内外の結社誌・同人雑誌などを中心に、読書や出版、芸術分野を含んだ約百四十誌。半年から一年分はバックナンバーも置いてある。新聞は、全国紙・地方紙と詩歌や書評の専門紙が約十紙ある。常設の「県人著作コーナー」には、山梨県出身・在住の文学者の著作を揃える。テーマを設けた「資料紹介」でも多様な図書・雑誌を並べている。紙資料以外では、「画像情報システム」で直筆原稿などの画像が多数見られる。作家名や資料名をディスプレイでタッチ、スクロールするだけだ。また、ビデオブースで、山梨ゆかりの作家や作品を学べる映像を約三十本上映している。

この機会に、閲覧室に、足を運んでいただきたい。暑い時期が終わつても、いつでも、ゆつくりと時間を過ごしに來て欲しい。

(資料情報課 小林幸代)

「寄贈資料より」

(平成三十年五月〜七月)

- 太田比奈子氏より井伏鱒二筆「富士川流域」など二〇点。
- 中山福美氏より中山堅恵「あだ名」原稿など一〇〇点。
- 上田雅人氏より山崎方代「寿」色紙など一五点。
- 小山弘明氏より「第六二回連翹忌」リーフレット。
- 篠崎美生子氏より篠崎美生子「芥川龍之介聴講ノート」支那戯曲講義塩谷温助教「授」翻刻(2)「抜き刷り」。
- 横川翔氏より横川翔「雑誌『アカネ』の再検討」抜き刷り。
- 佐佐木幸綱氏より佐佐木幸綱筆 佐佐木信綱「鳥の聲水のひびきに夜はあけて神代ににたり山中の村」一枚物など二点。

次の皆様からも図書・雑誌をご寄贈いただきました。(敬称略)

- | | |
|----------|-------|
| 芦澤 紗知子 | 中島 国彦 |
| 一瀬 公弘 | 萩原 篤弘 |
| 河西 正克 | 秦 恒平 |
| 木下 宏一 | 花里 鬼童 |
| 小石川 正文 | 平松 伴子 |
| 小林 高志 | 松本 徹 |
| 坂本 宮尾 | 榎田 良枝 |
| 沢口 芙美 | 米山 和江 |
| せきぐち さちえ | |

この他に団体の方々からも寄贈いただいております。

教育普及事業より

○文学創作教室

神永学講演会「わたしを創ったもの」
7月14日(土)に文学創作教室の一環として講演会を開催した。

富士川町(旧増穂町)出身の小説家、神永学氏が、作家を目指したきっかけや、自らの創作活動について語った。「格好をつけた文章を書かない」「固定観念にとらわれず自由に書く」などの文章を書く上での心構えや、仕事で出会った強烈な個性をもつ編集者のエピソードなど、話の内容は多岐にわたった。

後半には参加者から活発に質問が寄せられ、一つ一つの質問に丁寧に答えられた。

「創作の参考になった」「山梨県出身の作家の話聞くことができてよかった」等の声が寄せられた。



○夏のワークショップ

・「子どもとその保護者のための『俳句入門』」

7月7日(土)、俳人の井上康明氏を講師に、親子俳句ワークショップを開催した。受講生は、芸術の森公園を散策した後、俳句をつくり、互いに鑑賞し合った。

参加者からは「俳句づくりは難しいイメージだったが、楽しめた」「言葉一つ一つを深く考えるようになった」「もっと俳句をつくりたい」という声があがり、親子で充実した時間を過ごした様子であった。

・「デコパージュで『童話の花束』を身近に」

7月29日(日)、美術講師の小林睦実氏を迎え、夏の特設展「童話の花束」関連ワークショップを開催した。受講生は、童話に登場する動物や植物をモチーフとした絵をコーヒーカップやハンカチに貼り付けた。

参加者からは「親子で簡単に自分の作品を作れてうれしい」「やり方がわからないものを教えてもらい、よかった」といった声があがった。

・「あなたの心を鏡開き 太神楽の世界を体験しよう」

7月31日(火)、かがみもち(夫婦太神楽) 太神楽師 丸一仙三・仙花の両氏を講師に迎え、江戸時代から続く伝統芸能を体験するワークショップを開催した。受講生は「太神楽とは何か？」についての説明を受けた後、お手玉を使った

「投げ物」や紙テープを使った「立て物」などの太神楽芸を体験した。

参加者からは「普段はできないことを教えていただき、楽しい時間を過ごせた。」「バランス感覚や集中力がつく太神楽は、子どもによい」という声があがった。

館からのご案内

■教育普及事業

○朗読公演会「耳で聴く芥川龍之介

『名作「鼻」「歯車」の世界』

平成30年9月24日(月)

出演 辻輝猛 山谷典子 井上倫宏

制作 華のん企画

会場 講堂 定員500名 入場無料

※要申込。電話または当館受付、ホームページにてお申し込みください。

○名作映画鑑賞会

・10月6日(土)「愛と死を見つめて」

・11月17日(土)「幕末太陽傳」

いずれも午後1時30分

会場 講堂 定員500名 無料

※申込不要

■展示室

○常設展第一～四室

樋口一葉、芥川龍之介、飯田蛇笏など山梨県出身・ゆかりの作家を紹介する各コーナーの展示替えとともに、第一室で期間限定の資料展示を以下のとおり行います。

・秋の常設展

小説家・熊王徳平

8月28日(火) ～ 12月2日(日)

・冬の常設展

小林一三と文芸

12月4日(火) ～ 3月10日(日)

○常設展第五室

山梨出身・ゆかりの文学者104名を

二期に分けて展示。

・10月6日(土)からは、詩・短歌・俳句・川柳・漢詩のジャンルを展示します。

・第五室は、8月28日(火) ～ 10月5日(金)、11月27日(火)は休室します。

○新収蔵品展

1月26日(土) ～ 3月24日(日)

平成30年に新たに収蔵された文学資料を展示します。観覧無料。

■閲覧室

○閲覧室資料紹介

・「映像になった文学作品 平成をふり返って」

2月8日(金) ～ 4月7日(日)

○文学者の誕生日にちなんだ資料紹介

・「山崎方代」(11月1日生まれ)

10月26日(金) ～ 11月15日(木)

・「与謝野晶子」(12月7日生まれ)

11月30日(金) ～ 12月20日(木)

・「中村星湖」(2月11日生まれ)

2月1日(金) ～ 2月21日(木)

○書庫見学

11月20日(火) 県民の日

午前11時と午後2時の2回

資料翻刻

太田黒克彦は、一八九五(明治二十八)年七月一

日、熊本市に生まれた児童文学作家、随筆家。済々
聳中退後に上京、中央公論社編集部勤務したが、
三十歳頃から文筆に専念し、「コドモノクニ」や「少
年倶楽部」などに童謡や冒険小説を発表。特に、動
植物の生態を精緻に観察した作品を多く執筆した。

一九四六(昭和二十一年)年十二月、「小ぶなものが
たり」が野間文芸奨励賞を受賞、一九五六年九月に
大日本雄弁会講談社から刊行された『マスの大旅行』
が、サンケイ児童出版文化賞奨励賞を受賞している。

一九四五年一月、山梨県北巨摩郡穴山村(現在の韮
崎市穴山町)に疎開。戦後に上京するが、再び穴山
村に居住し、一九六七年十二月二十八日、同地で死
去。当館館報第六十九号(二〇〇七年六月二十日発
行)の「資料紹介」では、遺族より寄贈された「マ
スの大旅行」草稿など、太田黒克彦関連資料を紹介
した。

太田黒克彦 竹村書房宛書簡(葉書)

一九三六(昭和十一年)年六月十二日消印

拝復

先日は失礼いたしました。

近日おそくも二十日までには拙稿プランの御返事申上
ます。それではおそくなりますか。いろくとのたの
しく考へをります。

ハシカの御経過いかがですか。御大切にいのります。
蛇足 題名一案 家庭自然読本 右、要するに、家
庭にすゝめるといふ意味

追伸 但し、原稿の件は、先日大江氏との御話にて
七月一ぱい位のつもりにて予定いたしをります。が。
それよりもっと早くなりますか知らず？充分ゆつくり
やりたいのですが。 草々

いそぎ乱筆にて取り敢えず、

〔受〕四谷区坂町七八 竹村書房御中 速達

〔発〕本郷千駄木町四六 太田黒克彦

〔註〕一銭五厘の郵便はがきにブルーブラックイン
クを使用。「速達」は赤色鉛筆。消印は「駒込11.6.
12」。

竹村坦は竹村書房社主。太田黒は、同年四月二十
日に竹村書房から随筆集『水辺手帖』を刊行してい
る。

太田黒克彦 竹村坦宛書簡(葉書)

一九四二(昭和十六)年四月二十九日

前略「いななけ愛馬」の装釘はどういふ事になって
をりませうか？誰かいゝ人はないかといふお話があ
りました。門外不出のみ多く果しません。ちよつ
とおたづね申上げます。いづれ近く拝眉の上にて又、
敬具

〔受〕四谷区北伊賀町十二 竹村坦様

〔発〕太田黒克彦 二十九日夜

〔註〕「松原湖ヨリ小倉山ヲ望ム」と印刷されたモ
ノクロ写真の絵葉書にブルーブラックインクを使
用。二銭切手一枚貼付。消印は「駒込16.4.30」。

『いななけ愛馬』は、竹村書房から一九四一(昭和十
六)年五月二十日に刊行、カバーは未見だが、表紙と
裏表紙に赤い芙蓉の花が描かれ、裏表紙にのみ蝶が
一頭配されている。また、表紙の書名は黒字の手書き
と思われる文字が使用されているが、本には装幀者
等の情報が記載されていない。

太田黒克彦 竹村坦宛書簡(葉書)

一九四二(昭和十六)年八月三十一日

前略 一昨日はさっそく川魚ものがたり十部お送り
下され御多忙中御世話様でした。これで僕の友人の
うちその年ごろの子供を有つ者及び釣りなどへ行く
者には先づひととほり贈りました。雑誌などへの原
稿一両日中にすむつもりですから双方の都合よくば
拝眉を得たいと思つてゐます。尚、印税はお待ちし
てゐますから宜しく願ひ上げます。 匆々不一

〔受〕四谷区北伊賀町十二 竹村坦様

〔発〕八月三十一日 太田黒克彦

〔註〕郵便はがきにブラックインクを使用。二銭切
手一枚貼付。消印は「駒込16.8.31」。

『川魚ものがたり』は、竹村書房から一九四一年
八月二十日に刊行。装幀は、小説家の下村千秋(一
八九三〜一九五五)。

太田黒克彦 竹村坦宛書簡(葉書)

一九四二(昭和十六)年九月三日消印(追伸ノ一)

(九月三日夜の手紙の追伸)「川魚ものがたり」の、「少
年少女読物集」と書かれた表紙の文字は私の友人間
では非常に悪評です。私もあんな風に書かれるとは
知らなかつた事です。「読物」といふ二字が何より
いけません。読物にはちがひないが、いやな言葉で
す。そこで、広告などの場合には、「少年少女のた
めの」とか、「児童と家庭」とかして下さい。何に
も書かないで、たゞ、「川魚ものがたり」でもいゝ
と思ひます。内容を示したかつたら、広告文の文章
の中でいへばいゝ。とにかくヨミモノお止め願上
す。

〈受〉四谷区北伊賀町十二 竹村坦様
〈発〉(追伸ノ二) 太田黒

〈註〉郵便はがきに黒インクを使用。二銭切手一枚貼付。消印は「東京中央16.9.3」。

葉書冒頭に書かれた「九月三日夜の手紙」は所蔵していない。『川魚ものがたり』のカバーは未見だが、表紙、背表紙、裏表紙、及び中身に「読物」の文字は印刷されていない。

太田黒克彦 竹村坦宛書簡(葉書)

一九四一(昭和十六)年九月三日消印(追伸ノ二)

その事は「いななけ愛馬」に書かれた「読物」といふ二字の時にも感じたのですが、あの内容は「読物」といはれても仕方がないと思ひました。しかし本当は、あれでも「少年少女小説」として貰ひたかつたのです。お会いする機会がすくないのでこんなくちがひも生じるのでせうから、できるだけ時々、今後は拝眉を得て互ひに意見の交換をしたいと希望いたします。尚、お礼おくれましたが、五人へ本をお送り下さって深謝、その中の宮内氏からも手紙もらひましたが、同氏は専門的に魚の写生をしてゐる人ですから、重版の時にはぜひ入れたいと希望いたします。

この二枚のハガキには無遠慮に不服を申述べました。何卒あしからず。いづれ拝眉の上。

〈受〉四谷区北伊賀町十二 竹村坦様

〈発〉(追伸ノ二) 克彦

〈註〉郵便はがきに黒インクを使用。二銭切手一枚貼付。消印は「東京中央16.9.3」。

前出『いななけ愛馬』の表紙と背表紙に「少年少女読物集」の文字が印刷されている。太田黒は、同書の「はしがき」に、収録作品を「少年少女小説」と表記している。

太田黒克彦 竹村坦宛書簡(葉書)

一九四一(昭和十六)年九月十日

拝復 御多忙中の御手紙拝見しました。万一こちらへ御来遊あれば等とも思つてゐました、近く帰京、電話にておたづねの上、ちよつとお目にかゝりたく思つてゐます、僕は吾妻川へ廻りたいと思つてゐましたが、元気があまり出ないので一旦帰京、出なほしたいつもりです、持つて来た本のうち「山郷風物誌」がありますが、いつぞやの「問題」はともかく、再読して「得る」ところ相当です。山、天体、動物、植物と、今度のの参考書をいろ／＼読んでみると、それからそれへ糸を引き、もつと見に行きたいものも多く、キリがなくなるやうです、 匆々敬具
〈受〉東京市四谷区北伊賀町十二 竹村坦様
〈発〉榛名にて 克彦 九月十日夕
〈註〉郵便はがきに黒インク使用。二銭切手一枚貼付。『山郷風物誌』は、一九三四(昭和九)年六月二十五日に竹村書房から出版された登山家で随筆家の長尾宏也(一九〇四〜一九九四)の随筆集。

太田黒克彦 竹村坦宛書簡(葉書)

一九四一(昭和十六)年九月十七日

前略「水辺手帖」二部さつそく御送りいたゞき、こわすのはをしいけれど、こわします。先は右御礼まで。以下後便にて 不備

〈受〉四谷区北伊賀町十二 竹村坦様

〈発〉十七日夜、克彦

〈註〉「箱根駒ヶ岳―湯ノ花澤温泉駒ヶ岳ホテル」と印刷されたモノクロ写真の絵葉書にブルーブラッ

クインクを使用。二銭切手一枚貼付。消印は「駒込16.9.18」。

太田黒は、「主に水に縁あるもの」(跋文より)を集めた随筆集『水辺手帖』(一九三六年四月二十日竹村書房)の増補改訂版として、一九四二年六月二十五日、『水辺随筆』を日本電報通信社出版部から刊行している。

太田黒克彦 竹村坦宛書簡(葉書)

一九四一(昭和十六)年十一月十七日消印

前略、明十八日午后ちよつとお訪ねしたいと存じますが御在宅でせうか?御都合わかつたら御面倒乍ら速達便にて願上げます。御返事なき場合には、たぶん御在宅と思つて伺ひます。明日はちよつと東京のまん中へ行くついでがあるものですから。先は右まで 匆々

〈受〉四谷区、北伊賀町、十二 竹村坦様 速達

〈発〉本郷区千駄木町五〇 太田黒克彦

〈註〉「涼風流れ／流るゝすゞ風、心気澄みて、遙かに仰ぐは／霊の嶺富岳、三ツ峠に憩ふひとゞき」(国立公園・富士五湖)と印刷されたモノクロ写真の絵葉書にブルーブラックインクを使用。切手部分が切り取られている。消印は「四谷16.11.17」。「速達」は朱筆。

(翻刻者 学芸課 保坂雅子)

〔訂正〕一〇五号「資料翻刻」註記の「東京女子師範学校」は、「東京女子高等師範学校」の誤り

でした。お詫びして訂正いたします。

館 の 日 誌

- 6・5 (火) 夏の常設展 期間限定公開
「高浜虚子と山中湖の虚子山荘」(~8・26)
- 6・8 (金) 閲覧室 文学者の誕生日にちなんだ資料紹介「太宰治」(~6・28)
浅川中学校出前授業(魅力的な短歌の作り方)
- 6・9 (土) 書庫見学
年間文学講座1「はじまりは信玄公誕生—『中興略説』」
講師 長谷川千秋(山梨大学教授)
- 6・10 (日) 町田康講演会「井伏鱒二の笑いと悲しみ」
講師 町田康(作家)
第2回読書会
- 6・15 (金) 都留高等学校出前授業(魅力的な短歌の作り方)
- 6・21 (木) 年間文学講座2「黒澤明『赤富士』(『夢』第6話)を観る/読む」
講師 菊池有希(都留文科大学准教授)
- 6・24 (日) 文学創作教室「初心者短歌教室」第3回
講師 三枝浩樹(歌人)
- 6・30 (土) 年間文学講座1「お城の伝説—躑躅ヶ先館と新府城」
講師 長谷川千秋(山梨大学教授)
- 7・7 (土) 夏のワークショップ「子どもとその保護者のための『俳句入門』」
講師 井上康明(俳人)
- 7・8 (日) 第3回読書会
- 7・12 (木) 飯沢中学校出前授業(魅力的な短歌の作り方)
- 7・14 (土) 特設展「童話の花束 子どもたちへの贈り物」(~8・26)
閲覧室資料紹介「みんなで読もう日本の名作」(~8・26)
文学創作教室 神永学講演会
「わたしを創ったもの」講師 神永学(作家)
- 7・16 (月・祝) 夏休み自由研究プロジェクト「お花のうちわづくり」
茶室「素心菴」にて呈茶
- 学芸員実習(~7・22)
- 7・22 (日) 年間文学講座3「童話創作の背景—芥川龍之介・村岡花子・徳永寿美子—」—特設展「童話の花束」関連講座
講師 保坂雅子(当館学芸課長)
- 7・24 (火) 教師のための学習会
- 7・26 (木) 年間文学講座2「明治期の紀行文と富士山」
講師 野口哲也(都留文科大学准教授)
- 7・28 (土) 年間文学講座1「三枝氏の伝説—大善寺」
講師 長谷川千秋(山梨大学教授)
- 7・29 (日) 夏のワークショップ「デコパージュで『童話の花束』を身近に」
講師 小林陸実(美術講師)
- 7・31 (火) 夏のワークショップ「あなたの心を鏡開き 太神楽の世界を体験しよう」
講師 かがみもち(夫婦太神楽) 太神楽師 丸一 仙三・仙花
- 8・1 (水) ジュニアインターンシップ受け入れ(~8・5)
- 8・2 (木) 年間文学講座2「夏目漱石・多和田葉子と富士山」
講師 野口哲也(都留文科大学准教授)
- 8・5 (日) 名作映画鑑賞会「赤毛のアン」
- 8・12 (日) 第4回読書会
- 8・28 (火) 秋の常設展 期間限定公開
小説家・熊王徳平(~12・2)
- 8・31 (金) 年間文学講座1「上洛したご本尊—秀吉と善光寺・付牛塚」
講師 長谷川千秋(山梨大学教授)
- 9・6 (木) 年間文学講座2「太宰治『富嶽百景』の時代 永井荷風・横光利一」
講師 古川裕佳(都留文科大学教授)
- 9・7 (金) 閲覧室 文学者の誕生日にちなんだ資料紹介「辻邦生」(~9・27)
- 9・8 (土) 文学創作教室
講師 三枝昂之(当館館長・歌人)
- 9・9 (日) 第5回読書会

利用のご案内

■開館時間

- 展示室 9:00~17:00(入室は16:30まで)
- 閲覧室・研究室 9:00~19:00(土・日・祝日は18:00まで)
- 講堂・研修室 9:00~21:00
- 茶室 9:00~21:00(準備・片付けの時間も含まれます)
- ミュージアムショップ 9:30~16:20

■休館日(9月~3月)

- 9月3・10・18・25日
- 10月1・9・15・22・29日
- 11月5・12・19・26日
- 12月3・10・17日
- 1月7・28日
- 2月4・12・18・25日
- 3月4・11・18・25日
- 年末年始は、12月25日(火)~1月1日(火)まで休館します。また、1月15日(火)~1月22日(火)は館内整備等のため休館します。

■施設利用のお申込について

- 講堂・研修室・研究室・茶室の申込みは、使用しようとする日の6ヶ月前から原則として10日前までです。
- ☆いずれも休館日は受け付けません。使用上の注意は申込みの際、ご説明いたします。

■展示室観覧料

	常設展			企画展		常設展と企画展のセット券
	個人	団体(20人以上)	美術館との共通券	個人	団体	
一般	320円	250円	670円	600円	480円	730円
大学生	210円	170円	340円	400円	320円	490円

※65歳以上の方(企画展は県内在住者のみ)、障害者手帳をご持参の方及び介護者、並びに高校生以下の児童・生徒の観覧料は無料です。

※11月20日(火)の県民の日は無料です。

山梨県立文学館 館報 第106号
平成30年9月10日発行

編集兼
発行人 三枝昂之

発行所 山梨県立文学館
〒400-0065

山梨県甲府市貢川一丁目5-35
☎055(235)8080 FAX 055(226)9032

<http://www.bungakukan.pref.yamanashi.jp/>
※紙面・記事・写真等の無断転載・転用はお断りします。